

村田芳子先生のご退職にあたって

法学部長 石上 泰州

本学スポーツ健康学部教授、学部長の村田芳子先生は、本年度末をもってご退職されます。筑波大学を定年退職されてからの6年間という短い期間ではありましたが、先生の本学へのご貢献、ご功績ははかりしれず、先生のご退職は、スポーツ健康学部はもとより、本学にとって大黒柱を失うかのごときであります。私にとりまして、先生が着任される前の本学を思い起こすのが難しいほどに、先生の存在はあまりにも大きく、ご退職が間近にせまるなか、感慨にふける日々であります。

静岡県静岡市にお生まれになられた先生は、現在の筑波大学、当時の東京教育大学の体育学部に入學されました。ご卒業後は同大学院の体育学研究科に進學され、体育学の研究者としての歩みを始められます。大学院の修了後は現在の筑波大学附属中学校、当時の東京教育大学附属中学校の教諭を経て、三重大学の教育学部に講師として招かれました。同大学で助教授に昇任された後、岡山大学の教育学部に転じておられましたが、2000年、請われて、母校である筑波大学体育科学系にご着任されます。筑波大学では、体育専門学群の副学群長、体育系コーチング学分野主任などの要職をご歴任され、2013年度からの2年間は、若き日に奉職された筑波大学附属中学校の校長職を兼務しておられます。先生は、大学ご入学以来、体育学の研究と教育一筋の生活をすごしてこれたと申せましょう。

本学が体育学の泰斗であられる先生とのご縁に恵まれたのは、本学がスポーツ系学部の設置準備を進めている最中でありました。当時、最も難儀しておりましたのは、学部の核となる学部長をお引き受けいただく方の人選でした。新設学部の学部長には、多彩な経歴、背景をもったチームをまとめることのできる力量と人格の魅力、メンバーから一目置かれるだけの研究上、教育上その他の実績が求められます。そのような人材を探し求めていた準備委員の久保教授や松永教授（当時）が東奔西走の末、我々は幸運にも村田先生にたどりつくことができ

ました。そして、先生はお二人の熱意あふれる懇請を快く受け入れてくださりました。大学設置・学校法人審議会の専門委員のご経験もある村田先生を学部長とする計画が固まって以降は、トントン拍子に準備、審査は進み、当初の予定通り、本学は2017年4月にスポーツ健康学部を設置するにいたったのであります。

本学にご着任後の村田先生は、まさに誠心誠意、精力的に、学部長として、ダンス部の指導者として、そして一人の教員として新学部の定着と発展に取り組んでくださいました。新学部のスタッフは若手中心でありましたが、先生は、そこに飛び込み、大いに語り、明るく、朗らかに学部を引っ張っていかれました。先生方も、村田先生を盛り立ててくださいました。村田イズムとでも申すべき、教育研究に向き合う真摯な姿勢は、毎月開催される「学部連絡会」において、学部の課題や学生情報をスタッフ全員で共有し、侃々諤々、解決策を協議していくなかでも浸透していったのでありましょう。いつのまにか、村田先生のお人柄そのものが、スポーツ健康学部のカラーになっていったように思われます。村田学部長のスポーツ健康学部の誕生を機に、本学は以前よりもはるかに明るく、そして元気になりました。

私にとりまして特に印象的でしたのは、学生一人一人と丁寧に向き合う先生のお姿です。例えば、ある学生のことが話題にのぼりますと、それがどのような学生であるのか、豊富な情報量をもって矢継ぎ早に嬉々として説明して下さいます。その学生はよく知らないなあ、などとおっしゃることは皆無でした。教育に携わる者ならばあたりまえ、と評することもできそうですが、教育の何たるかについて教育を受けたことのない身といたしましては、教育学部に永く籍をおかれた教育のプロというのはさすがなものだと敬服することしきりでした。村田先生は、意識的ではないかもしれませんが、あるべき大学人としての務めを自ら率先してはたされながら、私たち後進の範となってくださったように思います。

ともあれ、6年間を通じて、村田学部長のスポーツ健康学部は堅調に学生を集め、有為の人材を輩出してまいりました。設置準備に携わっておりました私どもが当初想定していた以上の成果を生むにいたっておりますのは、ひとえに村田先生の率先躬行と熱意あるリーダーシップの賜物と申し上げなければなりません。

村田先生の研究上のご功績については、まったくの門外漢が云々することなど

かないませんが、一点、ダンスの必修化についてふれることをお許しいただきたいと思います。先生のご専門は体育学のなかでも特にダンス、舞踊です。ご承知の向きも多いかと思いますが、我が国では十年ほど前から中学校の保健体育においてダンスの授業が必修化されました。2008年の学習指導要領改訂によるものですが、ダンス必修化の中心におられたのが、村田先生その人であります。かねてより先生は、学校体育実技の指導ビデオ「表現運動・ダンス」作成の主査をお務めになるなど、我が国の学校教育におけるダンスの指導を牽引されてこられましたので、必修化推進のリーダーとしてのご活躍を期待されたのは当然であったのでありましょう。なお、ダンスはもっぱら女子の種目として扱われてきたことに鑑みますと、「男女」必修化の実現は、男女共同参画の推進にも大きく寄与する一大事業であったのかと愚考します。ともあれ、我が国の保健体育教育の画期となるダンス必修化の実現には、村田先生のご尽力があったのだという事実を、私たちは誇らしく記憶にとどめてまいりたいところです。

以上、先生のご功績のほんの一端を書き連ねましたが、あらためて、本学が先生をお迎えすることができました幸運に思いをいたさずにはおけません。他方、大恩ある先生へのご無礼につきましても、付言させていただきたく存じます。それは、先生が本学のためにご提案くださった、体育館の増設と大学院の設置という二つの事業をご在職中に実現できなかったことです。先生は、学生に十分な教育を提供するためには体育館施設の拡充が不可欠であり、また、新学部の足腰を固め、盤石なものとするためには学部の完成にあわせた大学院の設置こそが有効であると、当初から粘り強く説いてこられました。残念ながら、本学を取り巻く諸環境がそれを許さず、いまだ今後の課題であり続けておりますが、私を含め、残された者は、先生からの宿題を忘れることなく、向き合ってまいりたいと思います。

さて、私の手元には、先生が前職の筑波大学を定年退職されるにあたって刊行された記念誌『踊るころ 踊るからだ』がございます。一瞥するだけでも、いかに先生が教え子、同僚、その他ご関係の皆さんに慕われ、愛され、敬われていたかが、ひしひしと伝わってまいります。延べにして100名近い方々が、それぞれに先生との思い出や先生のご功績を熱く語り、そして、心からの感謝の言葉を

捧げておられます。

先生は、傑出した研究者、舞踊家であり、また、ダンス教育の必修化を主導され、学部を一から育て上げた、卓越した指導者でもあられたわけですが、同時に、あるいはそれ以上に、一人の教育者であられたことに、あらためて気づかされた次第です。そして、教育者たる先生と、その指導を受けた教え子の皆さんとの結びつきが、それぞれに強く、また、深いものであることも知りました。つきなみながら、先生は真の教育者でいらっしゃるのだな、真の教育者の人生とは幸せなものなのだなど、畏敬と羨望とが入り混じった思いで、記念誌をめくっておりました。本学の柏木学長は、折にふれ後藤新平の「金を残すは三流、仕事を残すは二流、人を残すは一流」なる言葉をご紹介しますが、村田先生は、まさに、一流であられたわけです。そして、先生が残された脈々たる「人」の中に、本学の学生が加わっていったことは、まことに感慨無量という他ございません。

末筆ながら、二学部からなる大学の二人の学部長の一人として、有意義このうえない時間をたっぷりとごいっしょささせていただき、先生のご薫陶、ご教導を間近で賜ることができた僥倖に深く思いをいたしつつ、語り尽くせぬご厚誼の数々に衷心よりの御礼を申し上げさせていただきます。以上、心からの深謝をもちまして、献辞といたします。村田先生、ありがとうございました。どうぞ、益々お元気で。そして、これからもよろしくお願い申し上げます。